

---

# 四行詩

issei

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

四行詩

### 【コード】

N9756U

### 【作者名】

i s s e i

### 【あらすじ】

はじまりの音は

たつた一音だつた

(前書き)

共依存が僕の恋愛だったならこの歌は、きっと君になにも残さない。

誰が信じなくても

依存ではなく

君が好きだから僕は君と一緒に歩いてきた

たとえば、傘がひとつしかない土砂降りの雨の中でも

君の太陽になりたかったただけだったんだ

もしも頭上にあるのが濁った太陽でも

君がいてくれればそれでよかった

それが僕には分らなかったんだ

ランニングシャツを着たサンタクロースを見つけたかのように、君は満面の笑みで駆けてくる。

僕の隣で一息ついた君は、恋愛感情を隠すように、わざとらしく微笑む。自分の姿を投影したかのような君の姿に僕は一瞬だけ、戸惑う。

これは君に送る四行詩、聞いたことがある様な、無い様な、そんな有り触れた世界で唄われる、僕が君に送るこの世界で唯一の、僕の隣を不可視な距離感をおいて歩いて歩いている君に届ける、最後の夢の詩。

人一倍、誰かの愛情に敏感な君は、感情をわざとらしく抑える変な癖をもっていた。

誰かの感情が離れるその前に、自らその感情を断ち切ってしまう。でも、どこかでその繋がりを求めて、彷徨う。

誰でもいいや、なんて見え透いた嘘を自分の鎧にしている君が、僕の目の前にいた。

この幸せがいつまで続くのかと問うた君の表情は、いつ自分が自分の感情を隠してしまうのか、怯えているようにしか見えなかった。

ランニングシャツを着ていたら、それがサンタクロースだってどうしてわかるのだろう。

それでも君はあれがサンタクロースだったと言い張る。もしかしたらケンタッキーのカーネルサンダーズかもしれないのだ。話が逸れた。本当は逸れてはいないが、まあいい。

君はきつといま、恋をしている。でも、僕を理由にして、その恋を正当化している。なぜそんなことをするのだろうか。

それはきつと僕が君を好きだと話しているからだろう。

だから君は僕を理由に恋をする。僕のせいだという。自信過剰ではないと思うんだ。

もし僕を理由にしていなければ、僕にいちいち、もう存在しないはずの恋の話なんて、しないから。

君は、自分が正しかったことを証明したいんじゃない。

君は、自分が愛されていたことを確かめたかったんじゃない。

君は、自分が寂しいから恋をするんじゃない。

本当は全部、わかってるんだろう。

人一倍、思い込みの激しい君は、ただ愛される事を拒絶しているようだった。

なにかに託けて、誰かの愛情を嘘と裏切りに変えているように見えた。

本当は甘えていただけなのに、その甘え方が分らない、そんな赤ん坊のような君の恋愛観は、それでも君をここまで育ててきた。

だから君は感情に理由を求める。

私が寂しかっただけ、私が好きだっただけ、そして私が愛されていなかっただけ。

ここまで書いてきて、とっていつもどおりにドツールでつらつらと書いているだけだが、君には僕が必要なくて、僕の自己満足で書いているだけかもしれない。

まるで君の心情と違った文節ばかりだったかもしれない。

それでも、僕は君に理由をあげることがもうできない。

君にとって、あの震災の出来事は、不謹慎かもしれないけれどひとつの理由だったのかもしれない。

これまでの僕と君とのやりとりに、どこまで素直な心があったのか、本当のところ、それは君にしかわからない。

でも、もし時間があつたなら考えてみてはくれないか。

僕がどうしてこれを書いているのかを。

未練ではない、思いを断ち切るためでもない。  
答えはないのかもしれない。

それでも、この四行詩には僕が君に送ることのできる、恋の処方箋を書き連ねたつもりだ。

いらなければ、捨ててしまえばいいなんて、画期的だと思わないか、それに診察料も無料なのだから。

人一倍、嘘が得意な君は自分の素直な感情を出すのが苦手になって  
いる、そんな気がした。

本当は言いたくもないことを、本音を隠して、誰かに呟く。話して  
いるときは、それが本音でも、離れてみればもう、どれが本音なの  
か自分でもわからずに、わかったふりをする。

本当は伝えたかったありがとうや、ごめんなさいも、時間に紛れて、  
気がつけば心の鍵のかかった箱の中。

関係のない時に取り出しては、一人で眺めているような気がした。

お別れをしたはずの一ヶ月後にかかってくる、君からの定期的な電  
話。

それが僕の心を繋ぎ止める、確かめるためのものだったのか、所謂  
キープ君と世間では言うらしいね、それとも恋人とすれ違いたださ  
びしかっただけなのか、素直に言葉を発せられなかっただけなのか  
そのどれにせよ、いまの僕でダメならば、きつとこの先の僕もダメ  
なのだ。きつと君は理由を求めてしまうから。

だとしたら、どんな形でつながっていようと、それはお互いのため  
になどならない。

僕が君をいまだに好きだから、君は僕を理由に恋をしている、なん  
て、どれだけ悲しいことか。

それにそんな無駄なことをしている君が一番つらいだろうから。  
恋は、理由などないもないのだ。ただ、そこにあるだけで。

触れることも見ることもできない。しかし、そこにあるだけで心が

温まる。

君が僕にいった僕の性格は、もう変わっているよ。

唇の端を上げる癖は相変わらずだけど、僕はいま、一人でも大丈夫なほど、とはいえないけれど、それでも一人で美容院にも行けるようになったし、定食屋にも入れるようになった。

くだらないと笑うかい。でも、それが君知っている僕のはずだ。

そして、君がいなければ誰かを傍に置いていた。いま思い返せば、なんとまあ、君に心配をかけて、傷つけていたことか。それでもそれは君の理由にはならないけれど。

人一倍、二人でいた思い出を大切にする君は、ただ傍にいることだけを望んでいた。

本当にそれだけだった。なにかに理由をつけて、僕のそばに、そしていまは誰かのそばにいるのは、それが君の臆病な心も、寂しさの心も、意地っ張りな心も、素直じゃない心もすべてを、ただ、忘れられるから、忘れたつもりになれるから。

僕に関してだけいえば、僕はもう離れていく。それが君の選んだことだなんて、この期に及んで君のせいにはしない。

夜更けすぎの電話に出ることもない、君との僅かなつながりを求めたりもしない。

僕が選んだことだ。

何かに理由をつけなくちゃいけない繋がりなんて、儚いだけだから。見当はずれなことを言っているのかもしれない。

でも、君が本当にほしかったのは、安心できる場所じゃないこと、分かっていた。

それが君の、僕が絶対に与えることのできない領域だと宣言したうえで、それでいて僕との距離をぎりぎりです保つ事のできる嘘だった

つてこと。

君がほしかったのは、素直になれる場所。

泣いても笑っても、怒っても、どんな事があっても君が君でいられる場所。それはきつと、恋人じゃない、ただただ和やかな、家族。

さて、そろそろこの四行詩も終わりにしよう。

さんざん勝手なことを書かれて、君はひどくご立腹か、もしくはくだらないと携帯を投げ捨てているか、さて、いまのぼくには分りえないな。どのような君の仕草にしても、僕は謝るつもりなど毛頭ない。もしあつたならそれよりもありがとう、と伝えたいからね。

母親にも言われていたらしい僕との暗鬱たる未来に、少しは整理がついただろうか。

まあ、どういふ話をしていればそうなるのかわからないが、たぶんに昔の話を君がしていただけなのだろう。

君にとって僕がなんなのか、それは僕には分らない。

僕にとって君がなんなのか、分かっているが教えるつもりはない。

きつと君は、いや、もしかしたら君は、これは僕のひどく勝手な憶測だけれど、あくまで処方箋だから許してほしい、なにかといえればそれはいまだに僕との関係を修復するための理由を求めているのかもしれないね。

それにだけは、答えを渡しておく。きつとこれからの恋にも、苦い君の恋をすこしだけ甘くする、小さじ一杯の砂糖分くらいは役に立つかもしれないから。その答えは、素直さ。理由なんていらぬ。もし手放しが怖いのなら手を握ればいい。

まあ、人間そんなに簡単に素直になれれば苦労はいらないけれど、



でも本当にそうなんだ。

僕が離れていくから、とか、僕との過去に、とか、僕がしたこと、とか、自分を肯定しているんじゃないかって、理由のない、君の心からの素直な言葉が、一番大切だったこと。

それには誰だって応えてくれる。だって、だから「ありがとう」があるんだ。酒の勢いでぶちまけるんじゃないってね。素直なその言葉は、例え僕相手じゃなくても、君の大切な人に届くから。

この四行詩はそれを伝えたかった。

君が意地っ張りだっていつているんじゃない。

過去の非礼を詫びたいんじゃない。

君が素直になったとき、それが一番、穏やかでやさしい顔をしているから。

それを、最後に伝えたかったんだ。

読んでくれて、ありがとう。

もし、割愛した半年分とこの一年を、アンコールにお応えして書くならば、きつところなる。

読みたくなければ、ブラウザを閉じてしまっただ構わない。

読むなら、どうか僕のせいにしなくてほしい。君の覚束ない心を抉ってしまつかもしれないから、まあそれでも読むことを選んだのは君なのだけ。

いいのかい。

あと少しで後戻りはできなくなるよ。誰かが離れていくということは別のだれかと出会えるということだ。

だから人はみな、もちろん僕も君も恋をするのだろう。

もしかしたら君の心情をまったく取り違えているかもしれないし、もしかしたら君の心情を見事にとらえているかもしれない。君のあきれ顔か、君の笑い顔が目には浮かぶようだ。それでも、君自身の言葉、それは僕に話してきた僕を繋ぎ止める以外の、言葉が浮かびあがればいい。とはいっても、君からのさよならはもう聞き飽きているから、いらぬよ。無駄に傷つきたいほど、僕はマゾではないから。

あそこまで書いても読んでしまうのか。まあ、いい。君が灰皿にシールを貼っていた時のような、素直な心で読んでくれ。もしくは逗子海岸でイヤホン越しに音楽を聴いていた時のように、決して、喧嘩の時みたいにひねくれた心で読むなよ。連絡を取る手段もない今、これは僕の素直な心の独り言みたいなものだから。連想するならこの先の一言一言が、歳の数だけのバラの花束。

そういえば、気障なのも変わっていないのかもしれないな。

最後に。

僕は君と出会えて、たくさんのがあっても、それがあつたから今があり、理屈を抜きにして幸せだったと心から言える男になれた。

それが、僕のこの一年の集大成だ。

そして、僕の夢を、覚えているだろうか。

覚えていないって、そうか。

でも僕は僕が君に話した僕の夢を、覚えている。ドラマのような、劇的なシーンはもうないかもしれないけれど。

君の夢はなんだろう。

もし君の夢が変わっているならいまの僕には分かることなどできないけれど、君を振り回し、君に振り回された僕だから最後にこれくらいならいってもいいんじゃないだろうか。

人一倍、泣き虫な君に送る。

僕からの、心からの一行詩。

「僕の夢と、君の夢はきっと同じなはずだ」と。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9756u/>

---

四行詩

2011年10月6日20時44分発行